はしがき

本書は論客としての福沢諭吉の仕事を、主に現行の『福沢諭吉全集』（岩波書店）に収録されていない『時事新報』社説の分析を行うことから読み解こうとするものである。ここでの論客とは、社主（owner）として法人時事新報社の経営とその言論を預かる新聞人という概念のうち、とくに福沢個人の言論活動を示す表現である。本書は『時事新報』の社説のうちに福沢本人の言論があると考えて、法人としての時事新報社の見解と福沢自身のそれとを区別して考える。これは福沢の直弟子にして継受者と見なされてきた石河幹明や、彼の後継である富田正文により伝統的に取られてきた立場でもある。本書の主題は、そうした論客福沢の仕事が『時事新報』の論調とどのような関係にあるのかを、主に時事新報社の運営実態と関わらせることで浮かび上がらせるところにある。

全一七章立てとなっているが、一貫した構想で書き下ろされた論述ではなく、一部未公表を含む論文集である。そのうち第Ⅰ部第二章の発表が最も古く、平成一六年（二〇〇四）九月である。事実上の再掲だが、行論の都合上どうしても必要なので収録した。逆に最も新しいのが第Ⅱ部第九章で、発表は令和四年（二〇二二）五月である。

完成までの期間が一八年近くと長期にわたっているため、各章には様々な不統一がある。掲載にあたり社説の表記の仕方などは統一したが表現全般までには及んでいない。修正の程度は第Ⅰ部が最も大規模で、第Ⅱ部と第Ⅲ部については内容には手を触れずに主として重複の削除に留めている。散文体で書かれている第Ⅳ部に関してはわずかな変更に留めている。

次に各部について説明するが、各章の初出やねらいは各部扉裏に記載したので、ここでは全体的な流れを示す。

まず第Ⅰ部は、『時事新報』社説起草者判定について扱っている。第一章は主として方法論について記述するが、初出を大幅に書き換えた最終的な説明となっている。第二章は大正版『全集』「時事論集」所収社説の判定で、『福沢諭吉の真実』（二〇〇四年八月・文春新書）や『アジア独立論者 福沢諭吉』（二〇一二年七月・ミネルヴァ書房）と内容上

の重複がある。第三章・第四章・第五章は平成二五年度（二〇一三）に始まる科学研究費による『全集』非収録社説の起草者判定作業であるが、科研費による三年の研究期間ではとうてい終了しなかったため、以降令和三年度（二〇二一）まで勤務校の個人研究費等により継続した。そのため初出と本書に収録されている令和四年二月の再判定結果とは相違がある。

第Ⅱ部は、宗教論（第六章）・興業論（第七章）・移民論（第八章）・交通論（第九章）といった国内問題に関する主題の社説を一覧し、各論調と福沢の関係を探っている。また福沢以外とされる署名入社説を第十章で扱っていて、新聞の編集方針についての考察をしている。

第Ⅲ部は、清国論（第十一章）・朝鮮論（第十二章）・海軍論（第十三章）・陸軍論（第十四章）・外交貿易論（第十五章）といった対外問題に関する主題の社説を一覧し、各論調と福沢の関係を探っている。第Ⅱ部・第Ⅲ部の主題別論考は、第十章が平成二九年（二〇一七）の学会口頭発表を令和四年三月に論文化したほかは令和二年（二〇二〇）から二〇二二年にかけて発表されたもので、重複の削除のほかに変更はほとんどない。

第Ⅳ部は、主として論者の社説起草者研究への批判に応えた文章で、研究論文というより一種の散文である。そのため一人称は「私」となっている。第十六章は都倉武之による社説の起草者判定作業全般への疑問に対する反論である。また第十七章は幹明直孫の石河明子が著した石河伝の紹介と、それに付された拙著批判への応答である。

本文とは別建てとなっている終章は、井田進也による社説起草者についての最初の問題提起から現在に至る四半世紀の福沢研究の動向をまとめたものである。安川寿之輔はアジア蔑視の侵略主義者としての姿を二一世紀の福沢像として打ち出そうとしたのだが、結果は彼の思惑とはまったく逆の方向へ向かっている。とりわけ際立っているのは社説「脱亜論」の評価で、今日では日本を含むアジア諸国家に真の独立を促した画期的な論説として高評を得るに至っている。そればかりか、おおよそ創刊一〇年、明治でいえば二五年、西暦では一八九二年頃までの『時事新報』社説は福沢本人の意見をよく反映していて、同時期の署名著作との矛盾もないことまでは定説になったと言ってよいであろう。問題は、福沢が脳卒中の発作に倒れるまでの残り六年半の本人と新聞論調の関係なのである。